

心に「朝日茂さん」の火をともして

宮原 裕美子

岡山県

津山障害福祉課窓 ■、手話で応える宮原さん

宮原裕美子さんは津山市役所に専任手話通訳者として勤める。市役所の前には津山商業高校がある。この高校は朝日茂さんが卒業した高校である。

「毎朝通勤の時、朝日茂さんの通った高校の前を通ると、福祉にかかわる者として身の引き締まる思いがします」という宮原さん。

朝日茂さんは重い結核の身で、「健康で文化的な最低限度の生活」とは何か、憲法25条の生存権を問う裁判を起こし、それは「人間裁判」と呼ばれている。人間裁判は福祉にかかわる人にとっては、自分自身を写し出す鏡のようなものである。



プライバシーにかかわる相談は別室で相談

宮原さんの笑顔はろう者にとっての安心



ハーレーダビッドソン

手話サークルに通っていたのだが、本格的にやらねばと思うようになったことがあった。

34歳で中型の、35歳で大型バイクの免許をとり、ろう者のバイクチーム、サイレントバイカーズとツーリングに行くようになった。チームのメンバーは1340ccのハーレーダビッドソンに乗っており、宮原さんはヤマハの400ccのアメリカンバイクで付いて行った。行く先々でアナウンスやガイドの手話通訳を頼まれたが、うまく伝えきれなかった。そのことが、手話を本格的に学びきっかけになった。

専任手話通訳

宮原さんは県の登録手話通訳者になり、手話サークルや全通研の会員として活動していた。そんなとき、津山の専任手話通訳者が退職。彼女に白羽の矢が立った。「やれるのだろうか。自信がない」と迷っていた宮原さんの背中を押したのは、全通研岡山支部の仲間だった。岡山言う者友の会でも一緒に活動をしていた村上さんから「大丈夫、何が不安なの。自信

4年前から手話通訳は二人体制に



も技術も後でついてくる」と言われた。

津山に来て4年後、手話通訳士の試験は二度目の挑戦でクリアして自信をもって現場にのぞめるようになった。

市の窓口業務と手話通訳、依頼があれば現場に向いての手話通訳、仕事が終わってから、手話講座の講師、ろう体との打ち合わせなどなど、忙しいが充実した毎日である。市の窓口の手話通訳は4年前から二人体制になった。

いるだけで組合活動

月曜から金曜まで働いて、身分は非常勤嘱託、一人で生計を立てて、将来に不安を感じている。

津山市の職員労働組合に入った。岡山県本部の女性部の常任委員もやったことがある。その時、女性部長から「低賃金、非正規、一人で生計を立ててやっているところは、そのまま実態を話すだけで労働運動だ。あなたの存在そのものが労働運動だ」と言われたことも。

全には非常勤嘱託で専任手話通訳として活躍している人がたくさんいる。そんな人のためにも頑張って労働環境を変えていかななくてはと考えている。

津山に来て11年。劣悪な非正規の身分、処遇を自分のことのように考え、一緒に怒る正規の仲間の思いに涙が出たり、厳しい現実で心が折れそうになることもある。

このままで良いのか。宮原さんは心の中に「朝■茂」の火をともしながら、新たな視野と思いを加え、学びを深めている。

■ング運営委員会は議論することが多い



人間裁判の碑の前で



全通研岡山支部の運営委員会で



岡通研運営委員会のみんなど



ろっの友人と2年ぶりにスキーを楽しむ

写真・文 豆塚 猛